



劇場

戦後まで唯一の娯楽施設



2階を含めて500人ほどが入れました

近隣市町村史を見ると、劇場はたいてい大正の初期からあります。といってもバラックの土間にむしろを敷いた粗末な施設であったようですが、娯楽に恵まれない当時としては、十分な存在理由をもっていたに違いありません。

置戸に関しては、ちょうど100年前の大正4年(1915)2月5日付北海タイムスを見ると、「置戸演武大会」と題して「置戸市街劇場置戸座に於て去る1日演武会発会式挙行云々」という書き出しで、網走、野付牛からも剣士数十名が集まって、5人勝ち抜き戦を実施した記録が掲載されています。また分村のさい、役場所在地を巡って訓子府と争ったときの会場場所は、劇場が使用されています。したがって置戸は野付牛から分村する前に劇場がありましたが、建設年度も経営者も不明であるものの、北見で永年映画館を経営していた道上十松が、ある時期置戸座を経営していたことははっきりしています。

また、同14年発行の「置戸村誌」を見ると青木与市が「同5年十勝の止若から引っ越してきてから料亭青葉亭を経営する一方、劇場置戸座主たり」と記されていますが、何年から劇場を経営したかは定かではありません。その後青木から劇場を引き継いだのは、青木の親戚筋に当たる今井清春で、今井は数井造材部で働くかたわら昭和2年より劇場を経営、同10年より専業となっています。

この頃映画はちょうどトーキー時代に入り、今井は巡回映画班を組織して、7、8人の陣容をもって、網走および天塩方面の巡回映画を引き受けるなど手広く映画興行に乗りだす一方、上置戸方面から観客を動員するため、乗合バスと提携して往復バス賃プラス入場券のワンセット料金制度を設定するなどの方法も取り入れています。

戦争が始まると、映画制作も制限を受け、また芝居・浪曲・舞踊なども勝手に興業ができなかったため、劇場営業日は減少しました。当時の映画は35ミリで、映画上映に際しては必ずニュース映画1巻を先に写すことが条件になっていました。またこれより先無声映画時代は弁士が解説をしましたが、映画の題名や俳優の名前よりも、弁士の名前で入場者の数が増減したそうです。車に乗ってスピーカーによる宣伝や、新聞折り込みチラシによる宣伝ができなかった時代なので、PR方法は「街回り」といって芝居であれば太鼓を打ち、旗をなびかせながら出演俳優が衣装をつけて街をねり歩き、活動写真はのぼりによる街回りで客寄せの方法がとられました。

娯楽に乏しい時代であっただけに劇場は人気があり、また村唯一の大会場であるため人がたくさん集まる集会などは大いに劇場が利用されました。

(参照『置戸町史上巻』※文中人名敬称略)

有馬慎吾さんに北海道青少年顕彰



町民構成劇で進行役の青年や秋田開拓史に出演し、重要な役割を担っていた有馬慎吾さんが平成27年度北海道青少年顕彰を受賞し、11月27日に井上町長から伝達が行われました。

置戸町青年団体連絡協議会やオホーツク総合振興局管内青年団体協議会会長を務め、地域青年の育成、交流を目的に中心的な存在と

して、学習・主催事業・地域イベント協力など精力的に活動を続け、市町村の枠組みを超えて地域の活性化に貢献しています。

有馬さんは、「平成28年度に置戸町青年団体連絡協議会は70周年を迎えるので、町内の青年や置戸出身の若者が交流できる行事を計画していきたい」と意義込んでいます。